

老年：我々の未来 パンデミック後の高齢者の状況

教皇庁生命アカデミー*

学び取るべき教訓

今は、「全員が招集されるのを感じることができ、手厚いもてなし (ospitalità)、兄弟愛 (fraternità)、連帯 (solidarietà) の新たな形態を実現しうる空間を開く勇気を獲得する」^{*1} ときである。教皇フランチェスコは、2020年3月27日の祈りの中で、空っぽのサンピエトロ広場で、我々に次のことを思い起こさせた後で、このように話した。「収益を渴望し、富に心を奪われ、性急さにかまけて我々は疲弊させられている。我々は、あなたの呼び声の前で立ち止まらなかった。戦争と地球規模の不正義 (ingiustizie planetarie) の前で呼び覚まされなかった。貧しい者と、重病に罹った我々の惑星の叫びを聞かなかった。我々は平然として無関心であり続けた・・・」^{*2}。

教皇庁生命アカデミーは、「統合的な人間的発展省」(Dicastero per il Servizio dello Sviluppo Umano Integrale) と協調して、パンデミックの悲劇から引き出すべき教訓について、パンデミックが我々の社会の今日と近未来にもたらす帰結について、熟考して発言するよう問われるのを感じた。このパースペクティブにおいて、すでにアカデミーが公表した文書もある：「パンデミックと普遍的兄弟愛」^{*3} および「パンデミック時代における『人間のコミュニティ』」^{*4}。生命の復活についての季節外れの考察」^{*5}。

パンデミックは、二重の自覚を生じさせた。一方で、全員の間相互依存、そして他方で、強い不平等の存在。我々は皆、同じ嵐の勢力の中にいる。しかしある意味において、我々は別の船に乗って漕いでいるとも言える。最も脆弱な船が毎日沈んでいく。地球全体の発展モデルを再考する必要がある。人民の共通善を中心に置く、新しい社会態勢を整えるために、政治、経済、社会、宗教組織のすべてが問われている。コミュニティ全体の「公的 (pubblica)」形態に関わらない「プライベート (privato)」は、もはや存在しない。「公共善」への愛は、キリスト教の強迫観念ではない：それを具体的に順序立てて明確に表現

^{*1} FRANCESCO, *Momento straordinario di preghiera in tempo di pandemia*, 27 marzo 2020.

^{*2} FRANCESCO, *Ivi*.

^{*3} Nota del 30 marzo 2020.

^{*4} Nota del 22 luglio 2020. 「人間のコミュニティ (*Humana Communitas*)」は、教皇フランチェスコが 2019年1月6日に、生命アカデミー設立 25周年に際して、アカデミーに送付した手紙のタイトルである。

^{*5} この点については、2020年4月7日の「信徒、家族、生活省」の文書も参照。 *Nella solitudine il coronavirus uccide di più*, in <http://www.laityfamilylife.va/content/laityfamilylife/en/news/2020/nella-solitudine-il-coronavirus-uccide-di-piu.html>

すること (articolazione) が、現在、コミュニティの各メンバーの尊厳と同緯度、同じ高さの場所で共に生きるための、生死に関わる問題になっている。しかし、信徒にとって、固く結ばれた兄弟愛は、福音の教えにかなった情熱である：それは、より深い起源への、そしてより高い目的地への地平を開く。

かかる難しい文脈に、教皇フランチェスコの最新の回勅「兄弟全員」が浮上する。それは、摂理によって、高齢者の世界に、今日まで公共の注意からしばしば切り捨てられてきた「隣人」の輪郭を描くために布置される地平を描く。高齢者は実際に、最も打撃を受けている。65 歳以上の死者の数は恐ろしいものである。教皇フランチェスコは、以下のことを明らかにすることを怠らない。「我々は、世界のいくつかの場所で、コロナウイルスによって高齢者に起こることを目撃した。人はこのように死ぬべきではない。しかし実際には、[地球温暖化による] 熱波によって、また他の状況において、類似したことが起こった：容赦なく捨てられた。高齢者を隔離し、彼らを他のもののために、適切で思いやりのある家族の同伴なしに放棄することは、家族それ自体を毀損し、貧しいものにするのを我々は語らない。その上、それは最終的には、若者にとって必要な、彼らの根 [ルーツ] との接触と、また青年期がそれだけでは到達することのできない智恵との接触を、若者から奪うことになる」*6。

「信徒、家族、生活省 (Dicastero per i Laici, la Famiglia e la Vita)」が、いくつかの欧州諸国におけるロックダウン開始の数週間後、2020 年 4 月 7 日に公表した文書は、独居の、また孤立している高齢者と個人の困難な状況 ―ウイルスがかくも厳しく、この世代を打ちのめしている主たる原因の一つ― に注意を向けている。このテキストにおいて、以下のことが明言されている。「[高齢者向けの] 住宅建造物 (strutture residenziali) 内で生活している者は、特別な注意に値する：我々は毎日、彼らの状況についての恐ろしいニュースを聞き、生命を失った人はすでに無数である。このように多くの脆弱な (fragile) 人を同じ場所に集中させることと、保護の配備を調達することの難しさが、支援に専念するスタッフの献身と、いくつかのケースでは犠牲にもかかわらず、管理運営の困難な状況を生み出している」*7。

Covid-19 と高齢者

パンデミックの第一波の間、Covid-19 による死亡のかなりの部分は、高齢者施設 (istituzioni per anziani) において確証された。高齢者施設は、本来、「社会の最も脆弱な部分」が保護されるはずの場所である。しかし実際にはそれに反して、家や家庭環境に比べて、不釣り合いにより多くの死がこの場所を襲った。世界保健機関欧州事務局のトップ

*6 FRANCESCO, Lettera enciclica *Fratelli tutti. Sulla fraternità e l'amicizia sociale*, 2020, 19.

*7 DICASTERO PER I LAICI, LA FAMIGLIA E LA VITA, *Nella solitudine il coronavirus uccide di più*, 7 aprile 2020, in <http://www.laityfamilylife.va/content/laityfamilylife/it/news/2020/nella-solitudine-il-coronavirus-uccide-di-piu.html>

は、2020 年春に、この地域のコロナウイルスによる死亡の半分までがケアハウスで発生した、と宣言した。「想像できない悲劇」とコメントされた^{*8}。データの比較計算からは、同じ条件下ではむしろ「家庭」が、高齢者をよりよく保護したことが明らかになった。

とりわけより傷つけられやすく (*vulnerabili*) 孤独な高齢者の施設収容、すなわち彼らの面倒を見るための可能な唯一の解決としての提案は、多くの社会的文脈において、最も弱い人々 (*deboli*)、一すなわち、より家庭的な環境で、よりそれを必要とする人に、可能な最善のケアを保障することのできる手段と資金を使用する必要がある人々への、注意と感受性の欠如を明らかにする。かかるアプローチ〔最も弱い高齢者の施設収容〕は、教皇フランチェスコが「使い捨ての文化 (*cultura dello scarto*)」^{*9} を特徴づけたものを、疑いのない仕方では明白にする。孤独、混迷、記憶とアイデンティティの喪失、および認識の衰退のような時期と結びついたリスクが、この文脈において、より容易に出現する。しかし、これらの施設の使命は、その尊厳の完全な尊重において、しばしば苦痛にしろしづけられた道のりにおいて、老年者の家庭的、社会的、精神的同伴であるべきである。にもかかわらず、まさにその場所で、使い捨ての文化のリスクが顕在化している。

ブエノスアイレスの司教であった時代に、すでに教皇フランチェスコは強調していた。「高齢者を家庭や社会の生活から排除することは、背徳的なプロセスを表現する。そこには生活を、単に与え、所有する、すなわち市場だけではないものにするような無償、寛大、感情の豊かさは存在しない。高齢者を排除することは、しばしば我々の今の社会が自ら加える呪いである」^{*10}。

それゆえ、いかに現代社会が高齢の人口集団の、特にそれがより弱い場所では「隣人」にならなければならないかについて、綿密な、先見の明のある、そして誠実な熟考を行うことが、かつてないほど時宜に適っている。しかし Covid-19 の間に起こったことは、高齢者のケアの問題の解決を阻止する一贖罪の山羊、すなわち有罪の個人の捜索によって；また反対に、ケアハウスにおける感染を回避した者の極上の結果を擁護する合唱が起こることによって。しかし我々に必要なのは、社会が高齢者のケアをすることを可能にするような新しいビジョン、新しいパラダイムである。

長寿の祝福

あらゆるレベルで社会を巻き込むことのできる新しい真摯な熟考の要求は、我々全員が立ち会っている人口統計学の大きな変化の結果としても不可欠である。

統計学的・社会的側面下で、男女は、一般に今日、より長い人生の希望を持つ。こ

^{*8} 23 Aprile 2020 Associated Press

^{*9} FRANCESCO, Udienza generale, 5 giugno 2013.

^{*10} J.M. BERGOGLIO, *Solo l'amore ci può salvare*, LEV, Città del Vaticano 2013, p. 83.

の現象に関連する、幼児死亡率の顕著な減少が記録される。これは、世界の多くの国で、明瞭に四世代の共存をもたらした。この信じがたい事実は、言うまでもなく、医科学の進歩の、より進化した健康の、より普及したケアの、より連帯した社会生活の果実であるが、そこには世代間の関係に価値を与えることを習得する重要性について、我々に表明されるべき多くがあると思われる。地球は様相を変えつつある。社会は、それについてはっきり明確に順序立てて表現することで、それについてのより大きな自覚を獲得するべきである。

この大きな人口統計学の〔形態の〕変化は、実際に、文化的、人間学的、経済的挑戦を表現する。データが我々に伝えるのは、都市部の人口集団は、農村部よりも迅速に増加しており、都市部では高齢者の集中がより著しいことである。この現象が特に指摘するのは、重要なインパクト要因、すなわち死亡率のリスクの違いである。それは、都市部では低い傾向にある。型にはまったステレオタイプの見方がイメージさせるかもしれないところに反して、グローバル・レベルでは、都市は平均してより多くが住む場所である。それゆえ、高齢者は多数であるから、彼らにも居住可能な都市にすることが不可欠である。WHOのデータによると、2050年に世界では60歳以上が20億人になる：したがって、5人に1人が高齢者ということになる^{*11}。それゆえ、我々の都市を、高齢者と、一般に脆弱な状態にある人のすべてを包含し、居心地のよい場所にすることが不可欠である。

教皇フランチェスコが明確に表現したとおり、「今日、老年にふさわしいのは、人生の別の季節である：大多数の人にとって、〔老年は〕生産する義務が終了し、体力が衰え、病気と手助けの必要、そして社会的孤立の徴候が現れる年齢である；しかし多くの人々にとって、〔老年は〕心理的、物理的安寧と、労働の責務から解放された長い期間の始まりである。いずれの状況においても、これらの年齢をどのように生きるのか？ この人生の段階にどのような意味を与えるのか、大多数の人にとって、何が長くありうるのか？」^{*12}。我々の社会においては、つねに、そして単に、介護の、困窮の、そして医学的ケアのために出費する年齢としてのみ理解される不幸な年齢としての老年、という考えがしばしば支配的である。テレンティウス (Terenzio Afro) は2000年前に、老年それ自体を病気として語った：「*senectus ipsa est morbus* (白髪それ自体が病気である)」。しかし、聖書では、長寿は祝福とみなされる。「老年は、我々を対面させる —我々の脆弱性および相互依存と、我々の家族およびコミュニティのつながりと、そして特に我々の神の子どもたちと」。教皇フランチェスコは明確に指摘する。「老年は病気ではない。それは特典である！孤独は病気でありうる。しかし我々は、慈愛、隣接、霊的慰めをもって、それを癒やすことができる」。

いずれにせよ、高齢であることは神の賜であり、莫大な資源である。すなわち、たと

^{*11} WORLD HEALTH ORGANIZATION (2011), *Global Health and Aging*, in http://www.who.int/ageing/publications/global_health.pdf

^{*12} FRANCESCO, Discorso ai partecipanti al I Congresso internazionale di pastorale degli anziani sul tema “La ricchezza degli anni”, 31 gennaio 2020.

え病気がそれを失効させ、統合的で質の高い援助の必要性が生じるときでも、高齢は、ケアをもって保護すべき、〔努力によって勝ち取られた〕獲得物である。そして、「年齢の豊かさ」は真価を認められ保護されるべき宝物である、という我々全員の自覚を、このたびのパンデミックが補強したことは否定できない^{*13}。

より脆弱な高齢者のケアと援助の新しいモデル

文化的レベル、および市民的、キリスト教的良心のレベルで、高齢者のための援助モデルの深い再考が、かつてないほど時宜に適っている。

高齢者を「尊ぶ (onorare)」ことを学ぶことが、我々の社会の未来にとって、また最終的に、我々の未来のために、決定的に重要である。「律法の板〔十戒が刻まれた〕に、大変みごとな掟がある。それがみごとなのは、真理と一致し、我々の生命の意味についての深い熟考を生み出すことができるからである：『汝の父と汝の母を尊べ』。尊ぶことは、ヘブライ語では『peso (重さ)』、すなわち価値を意味する；尊ぶことは、存在 (presenza) の価値 — 生命と信仰に生じるもの — を認識することを意味する。[...] 新たな世代にとって充実した人生と、より正しい社会の実現は、あらゆる文脈と世界の地理学上の場所において、祖父母と高齢者が我々のために構成する、彼らの存在と豊かさの認識に依存する。彼らへの尊敬 (rispetto) は、かかる認識の論理的帰結 (corollario) である。それは、彼らをもてなし、援助し、彼らのクオリティとニーズの真価を認めるとき、かかるもの〔尊敬〕として表現される」^{*14}。

これらのうち、高齢者がこの特別な人生の段階を可能な限り、家庭的な環境で、ふだんの交友関係をもって、生きることができるために、ただちによりよい状況を創り出す義務がある。一体誰が、たとえより脆弱になっても、自分の愛する人や、より親しい人に囲まれて、自分の家で生活し続けることを欲しないだろうか？ 家族、家、自分の環境は、誰にとっても最も自然な選択である。

疑いなく、人がより若いときに関しては、必ずしもつねにすべてが変わらずに元のままというわけにはいかない；ときどき、在宅ケアを可能にするような解決が必要である。〔しかし〕自宅がもはや十分または適当ではない状況がある。これらのケースにおいては、「使い捨ての文化」に誘惑されない必要がある。それは、老年が自律の欠如をも意味するときに、有効な解決を模索することにおける怠慢と創造性の欠如において出現する可能性

^{*13} COMECE-FAFCE, *The elderly and the future of Europe. Intergenerational solidarity and cares in times of demographic change*, December 3, 2020.

^{*14} DICASTERO PER I LAICI, LA FAMIGLIA E LA VITA, *Conclusioni al I Congresso internazionale di pastorale degli anziani "La ricchezza degli anni"*, 30 gennaio 2020, in DICASTERO PER I LAICI, LA FAMIGLIA E LA VITA "La ricchezza degli anni", LEV, 2020, <http://www.laityfamilylife.va/content/laityfamilylife/it/eventi/2020/la-ricchezza-degli-anni/conclusioni.html>

がある。注意の中心に、そのニーズと権利とともに、人格を据えることは、進歩、文明およびキリスト教の真正の良心の表われである。

したがって、人格 (*persona*) が、この新たな、より脆弱な高齢者の援助とケアのパラダイムの核心でなければならない。どの高齢者も、他者とは異なっており、どの歴史の独自性もおおざりにされてはならない：その人のバイオグラフィー、生活環境、現在と過去との関係。新たな住居および援助のパースペクティブを見極めるためには、その人の権利の、歴史の、要求の、注意深い熟考から出発する必要がある。かかる原則の履行は、様々なレベルで、他とスムーズに連結され統合された (*articolato*) 介入を必然的に伴う。それは、老化の脆弱性に適さない精神的外傷 [トラウマ] になるような区切れなしに、自宅と何らかの外部サービスとの間での、援助の連続性 (*continuum*) を実現する。

かかるパースペクティブにおいて、特別な注意が住居 (*abitazioni*) に向けられる。それが高齢者の要求にふさわしいからである：建築上の障壁の存在、あるいは衛生的防御の不備、暖房の欠如、スペースの不足は、具体的に解決されなければならない。ここで病気になるか、弱く (*deboli*) なる時、あらゆることが克服できない障害物に変形しうる。自宅での援助 (*assistenza domiciliare*) は、住居での医学的ケアの可能性と所属地域でのサービスのふさわしい供給を伴う補完的・統合的 (*integrata*) なものでなければならない。換言すると、その生活が営まれる場所で、高齢者の「負担を引き受けること」を促進することが緊急不可欠である。すべてこれらのことは、社会的、市民的、文化的、道徳的転換を要求する。このようにしてのみ、ふさわしい仕方で、高齢者、とくにより弱く、危険にさらされた高齢者に近接する要求に応えることが可能だからである。

ケア提供者 (*care-giver*)、すでに数年前から西洋社会に存在する専門職の姿を増やさなければならない。しかし、才能を生かして家族を支えるような、[法的効力を持つ] 規範の枠内に組み入れられなければならない他の専門職もある。これらの専門職はすでに、存在のこの段階を「家庭的な」仕方で生きることを、高齢者に可能にしている。

多大なサポートが、新しいテクノロジーと遠隔医療および AI の進歩によってもたらされる：もしうまく使用され、供給されるなら、それは、自分の家、または家族の家に永住することを可能にする援助とケアの統合的なシステムを、高齢者の住居の周囲に創造することができる。家族、社会保健システム、ボランティア、そして陣営のすべてのアクター間での注意深くクリエイティブな同盟は、高齢者が、自らの住居に放置されなければならない事態を回避しうる。それゆえ、ここでの問題は、単にわずかなベッドを備えた施設を開設する、あるいは自由時間のための庭やアニメーター [元気づける人、励まし手] を供給することではないだろう。必要なのは、むしろ、社会衛生および援助の介入を人格的なものにする事 (*personalizzazione*) である。それは、高齢者ケアの新しいモデルを促

進する EU の要請に対する具体的な応答になりうるだろう^{*15}。かかる地平において、創造性と知性をもって、独立した生活、援助された生活、共同の家 (co-housing)、および相互援助の概念・価値に触発されるすべての経験が促進される。〔それらはすべて〕人格に対して、自己の自律的生活を保持することを可能にする。

かかる経験は、実際に、共同体の生活の利点を享受するプライベートな宿舎 (alloggio) で、すなわちトータルに共有された日常の管理システムおよび地域の看護人のようないくつかの保障されたサービスとともに、必要な設備を備えた建物で生活することを可能にする。伝統的な近所に照らすと、現代都市の居心地の悪さの多くは、それとは対照的である：孤独、経済的問題、情緒的なつながりの不足、ごく普通の援助の欠如。それらは、全世界における現代都市の成功と、その広範な普及の根本的な原因である。今日可能な住宅 (residenza) の定義と分類学は様々である：様々な、しかし前もって予定された年齢層のグループの共存を想定する、世代間の住宅；高齢者のみを受け入れる、しかし個別特殊な特徴を持つ住宅；あるいは、女性専用の住宅；若い家族を子どもおよび独身者と結びつける住宅；あるいは、いくつかのケアサービスおよびさらに多くのサービスの外部オペレーターとの統合を想定する住宅^{*16}。いくつかのケースにおいては、老年に歓迎される文脈を放棄して、「新たな生活」を始めることを欲する高齢者に対して、予め組織化された、手厚いもてなしを提供する必要も生ずる。

住まい (abitative) と援助の公式規格 (formule) に必要なのは、脆弱ではあるが、なお与え、共有する能力のある高齢の人格というアイデアについてのメンタリティとアプローチの深遠な変化である。

老人ホームを社会保健と「連続した一続きのもの (continuum)」に格上げする

これらの前置きに照らして、老人ホーム (casa di riposo [休息の家]) が、社会保健と連続した一続きのものに格上げされなければならないだろう。すなわち、高齢者の自宅で、直接、いくつかのサービスを、個人のニーズに合わせて、低いまたは高い強度で調整した援助の返答をもって、個々の人格の負担を引き受ける、「自宅での手厚いもてなし」を提供しなければならないだろう。そこでは、統合的な社会保健の援助と自宅居住が、新たな現代的パラダイムの心棒であり続ける。教皇フランチェスコは次のように強調した：「Covid-19 のパンデミックは、我々の社会が、高齢者の尊厳と脆弱性を正しく尊重して、彼らに対応するために組織化されていないことを明らかにした。高齢者へのケアがないと

^{*15} 2012 年は、諸々の国際機関が老年に努力を振り向けた年であった：EU は「アクティブな老化と世代間の連帯の欧州年」を宣言し、WHO は「世界健康の日 2012」を「老化と健康：良い健康は年齢に生命を加える」というテーマに振り向けた。

^{*16} 一つのパノラマ [全景俯瞰図] として、参照：C. DURRET, *Senior Cohousing, A Community approach to Independent Living - The Handbook*, 2019, Gabriola Island BC, Canada.

ころに、若者の未来はない」^{*17}。WHO が毎年その記念日に公表するデータは、制度化された文脈において頻繁以上に確証される虐待の存在に関して、教皇のことばを悲しく反響する^{*18}。

これらはすべて、家族をサポートする必要性をますます明らかにする。特に、家族がわずかな子や孫で構成されており、一人で、住居近くで、ときに要求の多い、エネルギーと資金面からみて代価の高い病人をケアする、消耗させる責任を担うことができないとき。必然的に、血縁の固いきずなに排他的に基づくのではなく、所属、友情、共通の感性、他者のニーズに応える相互の寛大さによって、スムーズに他と連結され統合される、より広い連帯の網〔ネット〕が再発明されなければならない。社会的関係の衰退は、実際に、特別な仕方が高齢者を襲う：年齢の進行および身体的、認知的脆弱性の出現とともに、しばしば依拠する人物、すなわち、自己の人生の諸問題に取り組むために頼ることのできる人を欠くようになる。たとえば米国で行われた歴史的な大調査は、1985年から2004年の間に、友情および支える人の網が、極度に縮小されたことを明らかにしている：1985年に人々は約三人の信頼できる人を数えることができた。2004年にこのデータは一人に縮小している。喪失は、親よりも友人に関わる。この現象は、保健需要のかの爆発—今日、適切な社会的応答を見出しておらず、不適切に処理されてはならないもの—を引き起こすに当たって、極めて重大な役割を果たした駆動力（driver）を提示する。社会的関係のまさしく網の衰退が、それ自体、身体的および精神的健康の条件自体に損傷を与える可能性のある事実だからである。

このため、市民的側面においても教会の側面においても、老化する者が孤独のまま放置されないよう、注意とケアを促進する慎重な計画によってもまた、現在のトレンドを逆転することが重要である。

様々な国において、老人ホームが、最後の数年における、転換期の世界に由来する、増加する需要への返答である。しかし多くの高齢者は、自らの家で生活を続け、この基本的な選択において援助され支えられることを要求している。多くの都市に、かつて、想像上の架空集団のための、よく知られた「場所」や建造物が存在した。高齢者は選択によって、あるいは自らの個人的状況に余儀なくされて、彼らの人生の最後の年月、そこに転居することを運命づけられた。年月の経過とともに、老人ホームは、その数も、住宅の種類や収容能力も増した。カトリック教会も、司教区やいくつかの宗教組織を通して、高齢者を手厚くもてなし、支援する多くの家を運営して自ら貢献してきたし、今も貢献している。敬虔なスタッフの存在は、古来からのそして評判の高い施設（istituzioni）にとって、確実な価値の要因である。それは長い間、高齢化のような、かくも複雑な社会問題への具体的な解決策であった。実際に、より脆弱な高齢者に対する支援を人間的なものにすることが、どのようにして可能であるかを示す、非常にみごとな模範が存在する：キリスト教的愛徳

^{*17} FRANCESCO, *Tweet* del 15 giugno 2020.

^{*18} <https://www.who.int/news-room/fact-sheets/detail/elder-abuse>.

の、慈善事業の、および古来からの施設の模範。それらは、たとえ困難でほとんど経済的に運営不可能な状況のさなかにおいても、エネルギーと努力を出し惜しみしない。

家族は、彼らの立場としては、必要に迫られて、自らの愛する人に良質な援助を提供することを希望して、しばしば公的および私的施設への収容という解決に頼る。また、昔、多くの家族はより高齢の家族のケアを自分の家で組織することに成功したが、今日、核家族という変更された構造 — 構成員の平均数の減少によって「より親密な」、そしてその内部で三つまたはそれ以上の世代を持つ「より長い」構造 — と、成年者を家から遠ざける就労の複雑な要求が、自分自身の高齢をケアすることを、全く新しい挑戦に変容させていることも否定できない。さらに、社会的貧困のいくつかの文脈において、施設収容による解決は、自分の家がないことに対する具体的返答になりうる。ある高齢者は、一人取り残されて、仲間を探すために、自動的に老人ホームに引っ越すことを選択し、他の者は、自分が息子や家族にとって重圧であり、迷惑であると感じるよう、支配的な文化に仕向けられて、そのようにする。

この施設の大部分において、高齢者の尊厳と尊重が、つねに援助活動の蝶番であった。しかしそこに光が当てられたとき、それとは対照的に、虐待と人権侵害のエピソードがますます多く出現している。かかる意味において、社会保健と援助のシステムは、公的なものも私的なものも、老人ホームをその内部に統合しつつ、第三および第四世代のケアのために、莫大な経済的資源を投じてきた。

しかし年月の経過に伴って、規準は、顧客の必要に対してより小さい、より機能的なモジュール〔測定標準〕でそれを維持することによって、大型住宅施設の規模を縮小することを課した。とは言え、老人ホームの環境が、住居としてよりも病院として構築されているように見えることも本当である。しかし、より特殊なエレメント — すなわち、病院においては、いったん治療されれば、退院する希望をもって入院するという事実 — が、そこには現実に存在しない。それは、今や、医学レベルでも文化レベルでも、集団的良心のうちに拡散した居心地の悪さを出現させている要因である。それゆえ、全員が面倒を見、奉仕し、出会うことのできる人間の組織 (tessuto) と援助およびもてなしの環境を保持することが重要である。教皇フランチェスコが想起するように：「高齢者は他人ではない。高齢者は我々である：たとえ我々が自分〔が高齢になったとき〕のことを考えなくても、間もなく、やがていつか、いずれにせよ、不可避免的にそうなる。そしてもし我々が高齢者をよく扱うことを習得しなければ、我々もそのように扱われることになる」^{*19}。

高齢者と脆弱性の強さ

この地平において、司教区、小教区、および教会のコミュニティは、高齢者の世界へのより慎重な熟考へと導かれる。最近 10 年間において、教皇たちは責任感と、高齢者の

^{*19} FRANCESCO, *Udienza Generale*, 4 marzo 2015.

パストラルケアを促すために、いっそう多く介入してきた。

高齢者の存在は大いなる資源である。無神論と独裁主義体制下の国々において、信仰を保持し若者に伝えるに当たって果たした彼らの決定的な役割を考えれば十分である。どれほど多くの祖父母が、孫たちに信仰を伝えようとし続けたことだろう。「多くの国の世俗化された社会において —教皇フランチェスコは言う— 父母の現代世代は、概して、かのキリスト教的教育や、かの生き生きした信仰を持たない。それに引き替え、祖父母は彼らの孫たちにそれを伝えることができる。彼らは子どもや若者に信仰を教えるために不可欠のリング〔輪〕である。我々は、彼らを司牧の地平に包含し、彼らを計算に入れることに慣れなければならない —単発的な仕方においてではなく、我々のコミュニティの生命力のある構成要素の一つとして。彼らは、我々が彼らの生活を管理する (custodire) ために援助し、保護するよう要求される単なる人格ではなく、福音宣教の司牧のアクター、神の忠実な愛の特権的証人でありうる」^{*20}。

もちろん、高齢者の側では、智恵をもって老いを生きることを探求しなければならない：「我々の道のりの最後の区間のこれらの年月は、贈物と使命：神の真の召命を含む」^{*21}。このために「高齢者の司牧が、あらゆる司牧と同様、教皇フランチェスコによって『福音の喜び』で開始された宣教の新しい時代に挿入された。このことが意味するのは、キリストの存在を高齢者にも告げることである。福音宣教は、あらゆる年齢の霊的成長に照準を合わせなければならない。なぜなら聖性への呼びかけは、全員に、すなわち祖父母に対するものでもあるからである。すべての高齢の人格が、すでにキリストと出会っているわけではなく、またたとえ出会いがあったとしても、人生の特別な段階において、自らの洗礼の意義を再発見するために、彼らを助けることが不可欠である〔・・・〕：神の愛の神秘と永遠の前で驚きを見つけるために；〔・・・〕慈悲の愛の神との関係を発見するために；我々のコミュニティに属する高齢者に、福音をまさに高齢者に伝えるための新しい福音化のアクターになってくれるよう依頼することによって。彼らは、宣教師であることを求められている」^{*22} —人生の他のどの年齢とも同様に。

かかる意味において、「教会は諸々の世代が聖霊の賜を相互に交換する関係において、神の愛の計画を分かち合うことを求められる場所〔になることができる〕。この世代間の分かち合いは、彼らと一緒に未来を注視することを習得するために、高齢者に対するまなざしを変えることを我々に義務づける。〔・・・〕神は、新しいページ、すなわち健康、奉

^{*20} FRANCESCO, Discorso ai partecipanti al I congresso internazionale di pastorale degli anziani “La ricchezza degli anni”, 31 gennaio 2020.

^{*21} FRANCESCO, *Udienza Generale*, 11 marzo 2015.

^{*22} DICASTERO PER I LAICI, LA FAMIGLIA E LA VITA, *Conclusioni al I Congresso internazionale di pastorale degli anziani “La ricchezza degli anni”*, 30 gennaio 2020, in <http://www.laityfamilylife.va/content/laityfamilylife/it/eventi/2020/la-ricchezza-degli-anni/conclusioni.html>

仕、祈りのページをも彼らとともに書くことができ、またそれを欲する」^{*23}。

若者と高齢者は、実際、知り合うことで、社会組織にかの新しい人間主義、社会をより連帯したものに作る人間主義をもたらすことができる。教皇フランチェスコは、祖父の側にいるよう、若者に幾度も勧告した。2020年7月26日、パンデミックのさなかに、若者に向けて教皇は言った：「私は若者に勧めたい。家で、また〔高齢者〕住宅で、何か月も愛する人に会っていない高齢者、特に最も孤独な高齢者にやさしさの態度を示すように。親愛なる若者たち、この高齢者の各々はあなた方のおじいさんです！彼らを孤独のまま放置してはいけません！愛の想像力を使いなさい。電話しなさい。ビデオを要求しなさい。メッセージを送りなさい。彼らに耳を傾けなさい〔・・・〕。彼らに抱擁を送りなさい」。また2012年にベネディクト16世は次のように言う機会を持った：「実り多い高齢者との接触なしに、真の人間的な成長と教育はありえません。なぜなら彼らの存在それ自体が、開かれた本のようなものであるからです。その本の中で、若い世代は彼らの人生の歩みについて、貴重な示唆を見つけることができるのです」。

老年は、人間の存在の最終目的地の意味も呼び戻す。ヨハネ・パウロ2世は、1999年に高齢者に向けて記した：「生命をその全体として考察するための正しいパースペクティブを取り戻さなければならない。そして正しいパースペクティブは、永遠である。人生は、そのあらゆる段階において、その意義深い準備である。老年もまた、永遠への道の上における人間存在の前進的な成熟のプロセスにおいて展開すべき役割を有する。もし人生が神の神秘への巡礼なら、老年はより自然に、この神秘の敷居〔出発点〕を注視するときである」^{*24}。老いる人は、終わりに近づくのではなく、永遠の神秘に近づく；それを理解するためには、神に近づき、神との関係のうちに生きる必要がある。高齢者の霊性、キリストとの親密な関係の必要性、そして信仰の分かち合いのケアをすることは、教会における愛徳の任務である。

高齢者がその脆弱性をもって与えることのできる証言もまた貴重である。それは「訓戒」、すなわち人生の教えとして読むことができる。ティベリアス湖岸での復活したイエスとペトロの出会い、それを表現する。使徒に向かってイエスは言う：「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる」（ヨハネ21,18）。この言葉に、老年において、弱くなった人格についてのすべての訓戒が要約されているように思われる：助けられるために「両手を伸ばす」。高齢者は、あらゆる人間存在の根本的な弱さを我々に思い起こさせる。たとえ健康なときも、愛され、支えられる必要を、我々に思い起こさせる。あらゆる自立を根こそぎにされた老年において、人は助力の物乞いになる。「弱いときにこそ私は強い」（コリントⅡ 12,10）と使徒パウロは書く。

^{*23} FRANCESCO, *Discorso ai partecipanti al I congresso internazionale di pastorale degli anziani "La ricchezza degli anni"*, 31 gennaio 2020.

^{*24} GIOVANNI PAOLO II, *Lettera agli Anziani*, 1999.

最初に人に手を差し伸べる神自身が、弱さのうちにある。

老年は、この霊的地平においても理解される：神への自棄〔委譲〕(abbandono)に適した年齢である。身体が弱くなり、精神的生命力、記憶、そして知的能力が減じるとき、神への人格の依存はますます明らかになるように見える。もちろん、老年を刑罰のように感じる者もいるが、老年を神との関係を再評価するための機会として感じる者もいる。人間的支柱が脱落して、根本的な徳が信仰になる。啓示された真理への同意としてだけではなく、見捨てることのない神の愛の確かさとして体験された信仰になる。

高齢者の弱さは、扇動的でもある：人生に立ち向かう仕方として、他者への依存を受け入れるよう、より若い者を招く。若者主義の文化のみが「高齢者」という語を軽蔑語のように感じさせる。高齢者の弱さを受け入れることのできる社会は、全員に将来への希望を提供することができる。しかし、脆弱な者から生きる権利を取り去ることは、とりわけ若者から希望を奪うことを意味する。なぜなら、ここでは、高齢者を捨てることは一言葉によるものであっても一、全員にとって重大な問題だからである。もてなしの大いなる欠如に基づくものは、排除の明白なメッセージを含意する：受胎された人格〔胎児〕から障害を持つ人格に至るまで、移民から路上生活者に至るまで。生命は、もし弱すぎてケアが必要であるならもてなされず、その変形ゆえに愛されず、その脆弱化ゆえに受け入れられない。そして残念ながら、それは遠い可能性ではなく、教皇が繰り返すように、放棄が安楽死の隠れた形態になり^{*25}、社会全体を危険にさらすメッセージを提出する場所で、頻繁に生じている。それは、弱さの反対が強さ (forza) ではなく、ギリシア人が名付けたような傲慢 (hybris) — 自らの限界を知らない思い上がり — であることを明確に表明する、危険な態度である。多くの傲慢が我々の社会に普及し、土の足でできた巨像を生んでいる。思い上がり、高慢、横柄、弱さの軽蔑は、自分が強いことを信じる人たちを特徴づける。それは、聖書において烙印を押された不名誉な態度である：「神の弱さは人よりも強い」(コリント I 1,25)。そして、神は強い者をくじくために、世間で弱い者を選んだ(コリント I 1,27 [神は…力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選びました])。キリスト教思想は、単に、受胎から死の瞬間まで、人の弱さを拒否することも隠すこともしないというだけでなく、人の弱さに名誉、意味、そして強さ〔力〕までも与える。もちろん、ただ皮相的に、老いゆくことは自動的により優れたものに成長することである、と言うことはできない：すでに成人の時期に存在した欠点や粗暴さは、際立ってくる可能性があり、自分の老いとその弱さとの出会いは、内的不自由さの時間、他者への閉鎖性、あるいは脆弱性の拒否を表明する可能性がある。

しかしキリスト教徒は — あなた方は特に —、老化だけでなく、老年における弱さの挑戦に応答するパースペクティブと新たな道を見極めるために、愛の知性をもって自らに問いたださなければならない。なぜなら、不意にやってくる可能性のある病気と自律の喪失が、諸々の問題と、助力の正当な需要を生むことを、否定することはできないからであ

^{*25} Cfr. FRANCESCO, *Incontro con gli anziani*, Piazza San Pietro, 28 settembre 2014.

る。

福音書の物語は、とりわけ、老年期の価値と驚くべき能力を明るみに出す。それは、主の奉獻、東方キリスト教の伝統では「出会いの祭日」と呼ばれる祝祭のエピソードに関わる。この機会において、幼児イエスに出会うのは、実に、二人の高齢者、シメオンとアンナであった。脆弱な老人が幼子イエスを人々の光として世界に啓示し、イエスのことを神の約束の完成を待っていたすべての人々に語る（cfr. ルカ 2-32, 38）。シメオンはイエスを腕に抱く。幼子と老人 —ほとんど現世の存在の最初と最後を象徴するような— は、互いに助け合う。実際、いくつかの典礼聖歌が宣言するように、「高齢者は幼子を抱いた。しかし幼子は老人を支えた」。希望はこのように、二人の脆弱な人格、幼子と老人の出会いからわき出る —性能と強さの文化を賞揚するこの我々の時代に、神は小さいものの中に大きいものを、やさしさのうちに強さを啓示することを欲することを、我々に思い起こさせるために。このエピソードは、教皇が何度も強調するように、幼子を神殿に連れてくるマリアとヨセフによって代表される若い人と、彼らを迎え入れ、彼らに教える老人、シメオンとアンナとの出会いをも告げる。しかし、出会いにおいて、役割は逆になる。聖書のテキストは、頻繁な繰り返しによって明らかにする。若い人がいかに「神の律法」が定めたことに固執し、伝統への忠実な固着を追求するかを（cfr. vv.22-24,27）—しかし他方で、老人は未来を預言して、聖霊の新たな事実を啓示するのである（cfr. vv.25-27 [シメオンが霊に導かれて神殿の境内に入ってきたとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た（27）]）。

このことは、若者と老人の間の、旧約の実現を可能にする、開かれた、暖かく心地よい出会いの肥沃な川床で起こる。「このエピソードは、ヨエルの預言を完成する。『あなたたちの老人は夢を見、あなたたちの若者は幻を見る』（ヨエル 3.1）。かの出会いの中で、若者は彼らの使命を理解し、老人は彼らの夢を実現する」^{*26}。この預言が我々に語るように見える未来は、一緒に耕されるときにのみ驚くべき可能性を開く。若者が自分の根を再発見しうるのは、もっぱら老人のお蔭であり、老人が夢見る能力を取り戻すのは、もっぱら若者のお蔭である。教皇フランチェスコは、この点について何度も、教会のためにも社会のためにも、祖父母たちに夢を見るよう大胆に励ますことを提案しつつ、その必要性を繰り返し指摘してきた。それは、祖父母たちのうちに希望の火を再び点すだけでなく、若い世代に老人の夢、すなわち、賢明に未来へと進むための記憶という、代替できない伝達手段からわき出る精気を与えるためでもある。純粹に生産的な理由によって老人を脇に追いやることで、老人から「預言者の役割」を取り上げることが、計り知れない貧困化、智慧と人間性の許しがたい喪失を引き起こすゆえんである。老人を切り捨てることで、社会が高みに向かって成長し、現在の一時的な窮迫に屈服しないことを可能にする根が断ち切られる。

我々が提示したいパラダイムは、抽象的なユートピアやナイーブな主張ではなく、公

^{*26} FRANCESCO, *Omelia*, 2 febbraio 2018.

的保健の新たな、より賢明な政策と、より老年にふさわしい援助システムのオリジナルな提案にも神経叢を延ばして栄養を与えることができるパラダイムである。より人間的であるだけでなく、より効果的なパラダイム。それは、共通善の倫理学と各個人の尊厳の尊重の原則 ―年齢はもとより、何らの差別もない― を要求する。市民社会全体、教会および様々な宗教的伝統、文化、学校、ボランティア、演劇、経済、ソーシャル・コミュニケーションの世界は、このコペルニクス的変革の内部で、新しく鮮明な手段を提示し、支援する責任を感じ取らなければならない ―高齢者が彼らの家で、そしていずれにせよ病院よりも家に類似した自宅的な環境において、家族的な文脈で同伴され援助されることを可能にするために。これは、実行に移すべき文化の転換に関わる問題である。教皇庁生命アカデミーは、神 ―癒やし手であり愛の師である神― の像であり似姿である人間存在の深遠な真理を証明するためのより真正な径路として、この道を指示するために傾注することになるだろう。

ヴィンチェンツォ・パリア大司教
+ Vincenzo Paglia
会長

レンツォ・ペゴラロ神父
Mons. Renzo Pegoraro
書記官

バチカン市国、2021年2月2日

* 本稿は、Pontificia Academia pro Vita, LA VECCHIAIA: IL NOSTRO FUTURO,
La condizione degli anziani dopo la pandemia の全訳である。

[] 内は訳者による。

(traduzione giapponese : Etsuko Akiba)

訳：秋葉 悦子